

生活者の視点から考える“ネイチャーインタフェイス”とは……？  
読者から届けられた声の数々をご紹介します。

N-12号「価値と付加価値のはざままで」を読んで  
鷲本和子

前号の本欄で書かれていた「どうして子どもは勉強しなくちゃいけないんですか」というTVコマercialに関して、私自身も以前から気になっていたが、何が気になってるのか判然とせずに過ごしてきた。しかしよく考えると、このコマercialを見るたびに、いつも私だったらこう答えるのにといい思いがあったのだ。それは、一人の人間として何が正しくて何が間違っているのかを自分で考えるために勉強しなければいけないのだ、ということ。また、人はみな生まれながらにしてそれぞれに与えられた使命というものがあると思うから、自分の使命は一体何なのかを知らず、考えるためにも勉強は必要なのではないかということである。

それは、大峯氏のいわれる“人間性としての価値を身につける”ことにほかならない。また、教育を語るときに「個性を伸ばす」という言葉もよく耳にする。それぞれを一人の人間として育む、人間性としての価値を身につける。ことにより、“個性”というものは自ずと伸びるものではないだろうか。

以前“待ちの子育て”ということばを聞いた。子ども自身が育つのを待つということだったように記憶している。子どもたちを育てるということに対して、私たち大人は、前述の“人間性としての価値を身につける”点においてはきちんと関わらず、“付加価値”の部分においてはゆったりと待つという関わりかたが望ましいと思う。ゆとり教育、生活科、総合学習、子どもたちを取り巻く教

育環境はめまぐるしく変化している。その中で開われ始めた、子どもたちの学力低下。義務教育における学力低下は、社会の中で生きてゆくための基礎学力の低下をも意味することにはならないだろうか。

“価値”と“付加価値”、本来の意味でそれぞれの個性を伸ばそうとするなら、まず必要なのは、お互いを一人の人間として認めることのできる“価値”をきちんと身につけることだろう。

ジェンダー的視点を取り戻したい  
大峯郁衣

「今年こそは」。いつか始めたいと思っていた野菜づくり。半坪菜園の実現を夢見て、台所の生ゴミからできた自家製有機肥料の真っ黒でやわらかくて温かな感触を手に、園芸書と格闘中である。「土づくりがよければ半分以上は成功」だそうだから、まずは「天地返し」をおこなって土壌を改良するところから始める。焦らず、手抜きせず、愛情をもって……。これでようやく、我が家の環境問題もリサイクルの軌道に乗って一つだけ解決を見ることが出来るだろうか。

アジア諸国において、日本は韓国と並んで、ジェンダー格差（社会的・文化的な男女差）が少ないといわれている。女性が、学歴・職業・経済的自立の面で「男性並み」を実現し、男性がつくった社会的システム、すなわち、米国を中心とする世界経済の一体化を目指すグローバル化の流れに乗ったからである。

だが、他のアジア諸国では、いま、ジェンダー

的視点、すなわち、「女性」であることを再認識して、「性別役割分業」の良い面を積極的にとらえなおし、世界の環境破壊の元凶たるグローバル化に對峙して、この新しい考えの萌芽がある。

どこの国でも昔から女性には、食べ物や水の確保・家族の世話という奴隷的立場の歴史があるが、ジェンダー的視点とは、この「虐げられた性」の立場を逆手にとっているのである。つまり、女性が長い間の体験から得た、食糧や水や健康への知恵と知識に基づき、生態系の異常に對する鋭い洞察力を活かし、環境破壊を阻止して、自然との共生を図るシステムを生み出そうという視点である。

このような世界が広く実現したらどんなにか素晴らしいことだろう。だが、果たして、間に合うだろうか。先進国の女性は、安全な食糧や水や家族の健康を選ぶ自由を捨てて、自ら破壊しつつある環境の奴隷の志願者となってしまっていることに気づくだろうか。そして、身の回りの自然が健全かどうか、気づく動物の直感を枯渇させているということにも。一番恐れることは、金儲けの華やかな競争世界に身を置いていると、対極にある世界が地味で価値のない世界に映るのではないかとということである。

心と時間にゆとりができた最近になって、私自身、対極の世界の偉大なことを肌身で感じ始めている。そして、自分の非力なことも。土いじりひとつするにも手引書がないと何もできないのだから。苦笑しつつも、今年はジェンダー的視点でものごとを見ていきたいと思っている。

#### NI誌11号

「ウェアラブルの電磁波は危険なのか？」を読んで

東京大学 工学部 システム創成学科 川久保佐記

携帯電話が普及して以来、電磁波の影響がよく話題に上がるようになった。実際に世界的に研究がおこなわれ、科学的な裏づけとともに明確な限界の数値が示されている。しかしそれでもなお「影響なし」という証明をすることが難しいために、ユーザーに不安を与えていることを読んで非常に納得した。

これまでも身の回りに電磁波は多く溢れていたが、携帯電話の出現以来とくにその影響が心配されるようになったのは、携帯電話は身体の近傍で使用されるため、電磁波の発生源が身近にあることなどによると思われる。したがって終日稼働し、通信もおこなうウェアラブル機器の場合には、よりいっそう電磁波の不安感が高まるのではないだろうか。しかも新しい通信方式が開発されるにともない、これまでの規制基準で健康上の悪影響はないのかという不安も出てくる。これでは、安心してウェアラブル機器を使用できる日はなかなか来ないのではないかと思ってしまう。

この記事を読む前には、電磁波は身体に悪いという抽象的な印象しかなかったが、身体への影響にしても、内に誘発される電気信号や体内の分子の振動による体温上昇から、帯電したものに触れたときに起こるショックまで、さまざまなものがあるとわかった。しかしこれらも、細胞には影響するが健康に影響するレベルではないなど、影響の出方にはばらつきがあるとい

う。ウェアラブル機器開発の企業や政府は、いったいどれだけ緻密で広範囲を網羅した研究をしなければならぬのかと思うと、気の遠くなる思いがする。

現段階で想定されているのは、身体の表面に装着するタイプのウェアラブル機器だと思いが、将来、心臓のペースメーカーのように身体に埋め込むタイプの情報機器が使用可能となるときには、健康への影響もさらに細部まで研究されるだろう。人間がここまで技術を進めてしまうのは怖いような気もするが、健康への影響が懸念されるためにあるシステムが規制されると、またそれを可能にするような研究が進み、結局は進歩を遂げることになるのだろう。技術と健康（人）と環境のバランスは永遠の課題であるが、いつかそれらがうまく（最高の状態で）バランスをとっていけるように、将来技術者となる我々は日々勉強をしていかねばならないと思う。

